

活動報告書

報告者氏名：小椋 剛

所属：北海道紋別養護学校（高等部）

記録日：2013年2月25日

【対象児（群）の情報】

・学年

高等部1年生 男子生徒1名（生徒A） 女子生徒1名（生徒B）

・障害名

生徒A、生徒B：ダウン症候群

・障害と困難の内容

生徒A：手の巧緻性に課題がある。掲示物などの文字を読むことにとっても興味・関心がある。文字を書くことに興味・関心はあるが、手の巧緻性の関係から丁寧に書くことができず、「書いて伝える」ことに気持ちが向かない面がある。

生徒B：テレビや音楽、踊ることに興味・関心がある。手順を覚えることが苦手であり、また自分から余暇を選択できることを目標に学習に取り組んでいる。

【活動目的】

・当初のねらい

対象生徒Aに対しては、学校への学習や人との関わりなど興味・関心がとても高い。関わる相手に対しては、自分の思いを言葉で伝えることができている。今後の生活を考えると、人との関わりを広げたり、感謝の気持ちを伝えるためにも、手紙など文字で気持ちを伝える力も必要と考えた。よって、文字を入力する力、文字で気持ちを伝える力、文字によって人とやりとりする力を高めることをねらいとした。

対象生徒Bに対しては、主体的に余暇を過ごしてもらいたいという願いがあった。よって、学級へのiPadの導入により、iPadが余暇活動の一つになること、そしてYouTubeで自分が今見たい映像を検索する、機器の操作を覚え自分から楽しむことが、将来の生活を考えると必要な力と考え、指導したいというねらいがあった。

・実施期間

平成24年4月～平成25年2月

・実施者

小椋 剛、野寺 愛、濱崎 聖史

・実施者と対象児の関係

高等部1年指導担当（小椋、野寺）

高等部学部付教諭、情報教育部長（濱崎）

【活動内容と対象児（群）の変化】

・対象児（群）の事前の状況

（対象生徒Aについて）

文字を書く、または文字で発信する場面は、国語や生活単元学習など各教科等を合わせた指導、つまり教師に与えられた環境下に限られていた。自分から文字を書くことは少なかった。

（対象生徒Bについて）

余暇の場面で「〇〇やりたい」などの気持ちが大きく表出されず、または選択できず、教師の指示待ちの場面があった。教師が尋ねると、興味・関心の高い「嵐」「AKB48」という言葉が表出される。

・活動の具体的内容

（対象生徒Aについて）

国語や生活単元学習において、ePrint（有料版）のアプリを利用した。「手紙を書こう」という題材では、会話をとおして見本となる手紙文を教師が作成し、見本と照らし合わせながら文字を入力し、教師の支援を受けながら印刷するという展開で指導を行った。

また、毎日の余暇活動や国語の場面で、トーキングエイド（テキスト）のアプリを使用し、教師や友達、商品の名前を入力する、また自分で考えた、経験したことを文にして入力する指導を行った。この場面については、教師の支援は言葉掛けや指さし程度とする。

（対象生徒Bについて）

登校後や昼休みの余暇活動において、YouTubeのアプリを利用した。「嵐」や「AKB48」を教師が入力・検索し、教師と一緒に見て楽しむところから始め、自分で操作できるように言葉掛けや指さし等で指導を行った。また、余暇活動の選択肢の一つとして、iPadを挙げ、提示した。

・対象児（群）の事後の変化

（対象生徒Aについて）

「手紙を書こう」という題材では、1cm四方枠の文字盤のため、正しく入力することができず、多くの教師の指示を受けた形となった。しかしながら、自分が入力した文字が印刷され、手紙という形で目にしたときは喜ぶ様子も見られた。

トーキングエイド（テキスト）の活用では、余暇活動の場面で、自分からiPadを使用し、アプリを開き、自分の思いを20文字以上の文で入力することができた。また、教師に読んで聞かせ、楽しんでいた。

（対象生徒Bについて）

自分からiPadという余暇活動を選択したり、「〇〇が終わったら、iPadしていいよ」という言葉掛けを受けて活動に意欲的に取り組むことができた。YouTubeの「履歴」を活用し、その履歴一覧から自分の好きな動画を選択し、見て楽しむことができた。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

（対象生徒Aについて）

ePrintのアプリの活用では期待していた学習効果を得ることはできなかった。一方、トーキングエイドの活用では、自分一人で文字を入力することができるという楽しさに気づき、ほぼ毎日、自分から文字を入力（発信）していた。文字を発信することで自分の思いが相手に伝わるという喜びを感じていると考えられる。

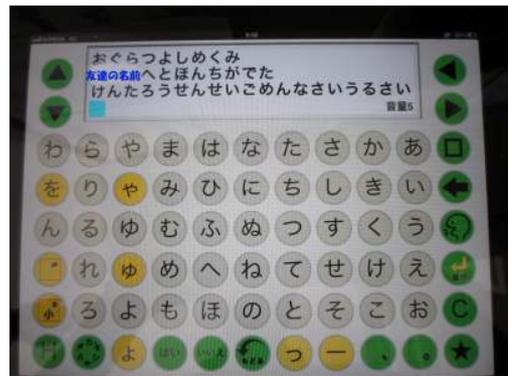
(対象生徒Bについて)

iPad や YouTube を一人で操作して、自分の好きな動画を見ることができるようになったことで、本生徒が達成感や意欲が高まったと考えられる。自己肯定感を高める学習へとつなげることができた。

・エビデンス (具体的数値など)

(対象生徒Aについて)

トーキングエイドの活用では、始めの段階では3～5文字程度の教師や友達の名前を入力であった。3か月が経過し、現在では、教師の名前、場所、「何をした」など動詞を含む言葉、「〇〇したい」など自分の気持ちを伝える言葉をつなげ、20～30文字程度の文を作ることができるようになった。



(対象生徒Bについて)

iPad や YouTube を一人で操作して動画を見ることができるようになるまで、期間として約8か月掛かった。自分で操作できるようになってから、週に3回以上は、登校後、係活動を終えて後に好きな動画を見て、余暇を楽しんでいる。

・その他エピソード (画像などを含めて)

対象生徒A, B共に、「〇〇やりたい」という思いは心に秘めている。「伝える」そして「分かってもらう」「達成感を感じる」という点で、困難さがあつたように思う。その困難さの程度を下げてくれたのが iPad である。パソコンには興味はあつたが、指先に力が入らなかつたり、キーボードやマウスの操作に難しさを感じていたため、パソコンを操作することができなかつた。iPad は画面への軽い力で操作でき、また反応するため、本当の「楽しさ」「喜び」を感じていた。教室の中に、自分から手に取り、操作して楽しむことができる機器があるというのは、大きな生活の充実、自己肯定感の向上だと考える。

また、高等部1年は4名の生徒が在籍している。興味・関心が限定されることが多く、教師として高校生という年齢相応の興味を持ってほしい (例えば、音楽業界のカテゴリーの場合、嵐、AKB48, EXILE) と考える。余暇活動の時間に、AKB48のミュージックビデオの鑑賞を設定した際、一つのiPadの前にみんなが集まり、4分ほど注目していたことがあつた。一つのものにみんなが共有できることはすばらしいと感じた一場面であつた。興味・関心を広げることは、将来の生活を考えると、とても大切なことと感じている。iPadの活用は、生徒の実態に合わせてアプリを選択し使用することで、「興味・関心を広げる」「できることが増える」「生活を楽しむことができる」ツールになると実感した。

